

# 社会福祉専門職養成における利用者理解に関する教育内容

米澤 美保子

The education contents for understanding of the client  
in social work education

Mihoko YONEZAWA

## 要 旨

ますます介護・福祉のニーズが多様化・高度化し、それらに対応する社会福祉士には資質の向上が求められており、国は指針による教育内容等を見直して社会福祉士の資質の向上を図っている。相談援助職である社会福祉士には、利用者理解が重要である。しかし、「社会福祉士学校の設置及び運営に係る指針」には実習中の指導項目の一つに留まっている。看護師や介護福祉士は、「領域の目的」や「教育の基本的考え方」に利用者理解が掲げられており、また先行研究も社会福祉士と比して多く見受けられる。そこで、看護師や介護福祉士の利用者理解に関する論述を概観し、社会福祉士養成における利用者理解に関する教育内容を検討することを本論の目的とする。介護福祉士養成における実践の中にある、時間軸を中心にしたライフレビューブックの作成は実習生の利用者理解を促す方法として有用であると考ええる。

キーワード 利用者理解 養成カリキュラム 社会福祉士

## 1. 問題の所在と目的

1987年に「社会福祉士及び介護福祉士法」が成立した。長年の悲願であった社会福祉資格制度の法定化が実現し、国家資格である社会福祉士が誕生した。法定化の背景には「高齢化と福祉ニーズへの専門的な対応」、「国際化と福祉専門家の養成」、「福祉関係者の人材の確保と資質の向上」、「シルバー・サービスの動向と資格制度の必要性」があった（秋山 1987）。

社会福祉士資格法定化に伴い、社会福祉の専門性について京極（1987）は、第一に職業倫理性、第二に専門的知識、第三に専門的技術を挙げている。第一の職業倫理性の具体的な内容の一つとして「人間の尊厳を守る人権擁護の見地（後略）」（京極 1987：45）と示している。

人間の尊厳を守る人権擁護には、利用者理解が不可欠である。社会福祉士に限らず、専門職にとって利用者理解は非常に重要な要素である。

2007年には「介護・福祉ニーズの多様化・高度化に対応し、人材の確保・資質の向上」を背景として、社会福祉士のカリキュラムが見直された。「個人の尊厳の保持」などが義務規定に加わった。福祉現場における高い実践力が求められた。また、厚生労働省は、「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」で、今後福祉的支援を必要とするものの増加が予想される中、全世代・全対象型地域包括支援の構築を掲げている。この包括的支援体制の構築には、「対象者を制度に当てはめるのではなく、本人のニーズを起点に支援を調整」することが重要であり、「世帯

全体の複合的・複雑化したニーズを捉え、解きほぐし、生育歴などの背景も勘案した本質的な課題の見立てを行う」ことが求められると示している（厚生労働省 2016a）。また、「新しい時代に対応した福祉の提供ビジョン工程表（案）」において、社会福祉士のあり方について、2017年にカリキュラムを見直し、2018年に新カリキュラムの周知が予定されている（厚生労働省 2016b）。このように、より一層利用者一人ひとりへのまなざしの強化が必要であり、利用者理解はさらに重要となる。

看護師養成における利用者理解に関しては、学生の利用者理解の実際の状況やプロセスが明らかにされている（松田 2004；宮地ほか 2005）。介護福祉士養成においては、学生を対象としたものだけでなく施設職員を対象として、利用者理解に関する教育について研究がなされている（萩原・谷口 2000；井川ほか 2011）。

しかしながら、社会福祉士養成においては利用者理解に関する研究はほとんど見受けられない。CiNii Articlesによる検索でも、表に示すように社会福祉士が6件、介護福祉士が18件、看護師が56件であった（表1）。

表1 CiNii Articlesによる検索結果

検索ワード	社会福祉士	介護福祉士	看護師
利用者理解	3	8	0
他者理解	2	3	5
人間理解	1	2	3
人の理解	0	2	1
対象者理解	0	3	0
患者理解	0	0	47
計	6	18	56

※2016年12月26日筆者調べ

養成カリキュラムにおいても、看護師や介護福祉士には利用者理解に係る内容が掲げられているが、社会福祉士に関しては実習中の指導項目の一つとして掲げられているに留まる。また、介護福祉士養成課程には利用者理解に関するカリキュラムがあるが、社会福祉士にはなく、「自分たちも学んできていないこともあって、実習生へ利用者理解に関する指導に戸惑っている」という社会福祉士の実習指導者の実情が存在する（米澤ほか 2016）。

このようなことから、看護師や介護福祉士養成における利用者理解についての論述を概観し、社会福祉士養成における利用者理解に関する教育内容を検討することを本論の目的とする。

## 2. 利用者理解

広辞苑によると「人の気持ちや立場がよくわかること」と示されている。

中村（2006）は、社会福祉における固有な人間理解は「観察者の視点、当事者の視点、および悩み苦しんでいる他者に直面したこの私の視点」（中村 2006:10）の3つの視点によって感じ考えたときに理解されるとしている。

また、「温かな心（Warm heart）に基づく福祉実践での気づき、そして、冷たい頭（Cool head）に基づく福祉問題の分析・理解のなかから、宗教的实践とは異なる社会福祉における固有な人間理解が生まれる」（中村 2006:12）と述べている。ここで示されている温かな心（Warm heart）とは、「人がもつ尊厳性・他者性・共存性といった聖なるもの・神秘的なものを感じ取れる」（中村 2006:12）ものであり、冷た

い頭（Cool head）とは、「福祉の問題を冷静に分析する」（中村 2006:12）ことである。

芝田（2013）は障害児教育のあり方を考える中で人間理解について示している。「人間理解は、障害児・者を含むあらゆる人に対する『個人の尊重』、つまり、個々の違いの相互容認を柱とするある意味、常識的な理解」（芝田 2013：25）であり、「少し意識すれば誰でも達成可能なこの『個人の尊重』の確認を初歩とし、それに基づく差別や偏見などの不適切な人間観の是正を意味している」（芝田 2013：25）としている。

中村（2006）、芝田（2013）は利用者と限定するのではなく、広く人間理解について述べているが、利用者を生活モデルで捉える視点、利用者を多角的に捉える点、利用者の尊厳を根底にしている点から、本論で考える利用者理解は両者が示す人間理解と同義とする。

また本論ではさらに加えて、利用者を専門職が関わる相手と広く捉えて述べていくこととする。

### 3. 専門職養成のカリキュラム内容

#### 3-1 社会福祉士養成のカリキュラム内容

「社会福祉士学校の設置及び運営に係る指針」（以下 社会福祉士学校指針）に示されている教育内容の中で、利用者理解に関する内容は次の通りである。

科目「心理学理論と心理的支援」のねらいに「心理学理論による人の理解」、科目「相談援助実習」の教育に含むべき事項として、巡回指導時等の確認・指導項目の一つとして「利用者理解とその需要の把握」と掲げられている（表2）（厚生労働省 2016c）。

表2 社会福祉士の教育内容

心理学理論と心理的支援	① 心理学理論による人の理解とその技法の基礎について理解する。 (以下②～④省略)	① 人の心理学的理解 (以下②～④省略)
相談援助実習	① 相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得する。 ② 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。 ③ 関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。	① 省略 ② 相談援助実習指導担当教員は巡回指導等を通して、次に掲げる事項について学生等及び実習指導者との連絡調整を密に行い、学生等の実習状況についての把握とともに実習中の個別指導を十分に行うものとする。 ア 省略 イ 利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 (以下 ウ～ク省略)

出典：「社会福祉士学校及び介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針について」（28文科高225号 社援発0401第42号 平成28年4月1日）別表1（P16,26,27）から筆者抜粋にて作成、下線筆者

#### 3-2 介護福祉士養成のカリキュラム内容

介護福祉士の教育内容については、「介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針」（以下 介護福祉士学校指針とする）の教育に関する事項に、「介護福祉士という職務の特性に鑑み、人権の重要性について十分理解させ、人権意識の普及・高揚が図られるような科目の設定又はその内容に配慮すること」（厚生労働省 2016c：53）ということが明示されている。人権の重要性は、社会福祉の専門職にとって不可欠かつ最重要であり、もちろん利用者理解の上でも前提となる。人権に関するこの内容は、社会福祉士学校指針には示されていない。

介護福祉士学校指針に示されている介護福祉士の教育内容における利用者理解に関しては次のとおりで

ある。

「人間と社会」領域の目的の一番目に「介護を必要とする者に対する全人的な理解」と示されている。同領域の教育内容「人間の尊厳と自立」「人間関係とコミュニケーション」のねらいに、それぞれ「人間の理解」が掲げられている。また、「介護」領域の教育内容「介護の基本」の教育に含む事項に「介護を必要とする人の理解」、「コミュニケーション技術」のねらいに「介護を必要とする者の理解」がある（表3）（厚生労働省 2016c）。

表3 介護福祉士の教育内容

領域	領域の目的		
人間と社会	1	介護を必要とする者に対する全人的な理解や尊厳の保持、介護実践の基盤となる教養、総合的な判断力及び豊かな人間性を涵養する。 (以下 2～4 省略)	
	教育内容	ねらい	教育に含むべき事項
	人間の尊厳と自立	「人間」の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について理解し、介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う学習とする。	① 人間の尊厳と自立 ② 介護における尊厳の保持・自立支援
介護	人間関係とコミュニケーション	介護実践のために必要な人間の理解や、他者への情報の伝達に必要な、基礎的なコミュニケーション能力を養うための学習とする。	① 人間関係の形成 ② コミュニケーションの基礎
	介護の基本	「尊厳の保持」「自立支援」という新しい介護の考え方を理解するとともに、「介護を必要とする人」を、生活の観点から捉えるための学習。また、介護における安全やチームケア等について理解するための学習とする。	(①～④省略) ⑤ 介護を必要とする人の理解 (以下⑥～⑩省略)
	コミュニケーション技術	介護を必要とする者の理解や援助的関係、援助的コミュニケーションについて理解するとともに、利用者や利用者家族、あるいは多職種協働におけるコミュニケーション能力を身につけるための学習とする。	(①～③略)

出典：「社会福祉士学校及び介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針について」（28文科高225号 社援発0401第42号 平成28年4月1日）別表1（P63,64,66）から筆者抜粋にて作成、下線筆者

### 3-3 看護師養成のカリキュラム内容

看護師教育における利用者理解に関して、「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」（以下看護師指導ガイドライン）に次のように示されている。

「看護師教育の基本的な考え方」の一番目の項目に「人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として幅広く理解し、」と掲げている。具体的教育内容では、基礎分野の「人間と生活・社会の理解」の留意点に「人間と社会を幅広く理解する内容とし、」、統合分野の「在宅看護論」の留意点に「地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、」と示されている。

また、「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」の「I群ヒューマンケアの基本的な能力」の「A対象の理解」の3項目目に「対象者を身体的・心理的・社会的・文化的側面から理解する」と掲げられている（表4-1,4-2）（厚生労働省 2016d）。

表 4-1 看護師教育の基本的考え方、留意点

教育の基本的考え方		
1) <u>人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として幅広く理解し、看護師としての人間関係を形成する能力を養う。</u> (以下 2)～6) 省略)		
	教育内容	留意点
基礎分野	科学的思考の基盤	「専門基礎分野」及び「専門分野」の基礎となる科目を設定し、併せて、科学的思考力及びコミュニケーション能力を高め、感性を磨き、自由で主体的な判断と行動を促す内容とする。
	<u>人間と生活・社会の理解</u>	<u>人間と社会を幅広く理解する</u> 内容とし、家族論、人間関係論、カウンセリング理論と技法等を含むものとする。 国際化及び情報化へ対応しうる能力を養う内容を含むものとする。 職務の特性に鑑み、人権の重要性について十分理解し、人権意識の普及・高揚を図る内容を含むことが望ましい。
統合分野	在宅看護論	在宅看護論では地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し地域での看護の基礎を学ぶ内容とする。 地域で提供する看護を理解し、基礎的な技術を身につけ、他職種と協働する中での看護の役割を理解する内容とする。 地域での終末期看護に関する内容も含むものとする。

表 4-2 看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標

I 群 ヒューマンケア の基本的な能力	A. 対象の理解	(1, 2 省略)	
		3	<u>対象者を身体的・心理的・社会的・文化的側面から理解する</u>

出典：「『看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインについて』の一部改正について（医政発1101第10号 平成28年11月1日）」  
別表3、別表13から筆者抜粋にて作成、下線筆者

## 4. 専門職養成における利用者理解に関する教育内容

### 4-1 介護福祉士養成における利用者理解に関する教育内容

屋台（2006）は、介護福祉士養成における第3段階の実習に臨む学生を対象にライフレビューブック作成を実践している。実習中に学生に利用者のライフレビューブックの作成を課している。ライフレビューブックとは、回想法の一つであり、高齢者の人生を一冊の本にまとめたものである。ライフサイクルを、幼少期、青年期、成人期、老年期と分け、8つのテーマ、そしてテーマごとの細かな項目に準じて高齢者に話を伺い作成する。ライフレビューブック作成に関する事前研修を実施した上で、実習中の実践に繋げている。

ライフレビューブック作成によって、利用者の思い出の紐解き、利用者の隠されていた意識の表在化、利用者の生活史の理解、利用者との関わり・時間の共有がなされ、学生の利用者理解に大きな影響を与えたと明らかにしている。

村上ほか（2000）は、大学1年生を対象とした実習指導において「時間軸」を導入したプログラムを実践している。実習の事前指導で自分史の作成、高齢者が生きてきた時代史の作成、祖父母へのインタビューを行う。実習中に利用者インタビューを行う。

この実習指導プログラムによって、高齢者それぞれに人生があるということに気づき、現在の価値観だけで高齢者の生活を考えることの難しさに気づくことができているとしている。

永島ほか（2008）は、主に大学3年生を対象とした実習の事前指導において、学生が使用している介護



技術のテキストを利用者の立場に立って見直し、利用者が介護をうけるためのガイドブックの作成を実施している。ガイドブック作成過程で学生は「自分が利用者だったら」と、相手の立場に立って様々なことを考えたことから、利用者に気持ちについての気づきが生じているとしている。

#### 4-2 看護師養成における利用者理解に関する教育内容

小坂・永易（2010）は、看護の対象は健康問題や不安や心配ごとなど不快な感情を持っていることが多く、対象理解のためには対象の自己開示を促すなどの対人関係能力が必要であることから、この能力向上を目的として構成的グループウエンカウンター（以下 SGEとする）の教育方法を大学1年生対象の授業で実施している。SGEによって、学生は相手の体験の追体験や自己の体験との比較をすることで、自分のことのように認識・共有して他者理解が深められているとしている。

遠藤ほか（2012）は、模擬患者（Simulated Patient以下 SPとする）を活用して口腔ケア演習を実施している。対象は大学2年生である。この実践により教科書などのテキスト情報からでは得られない、直接的関わりだからこそ得られる相手の気持ちなどの理解ができ、また他者を理解することの困難さとともに、他者を理解する大切さを認識することができているとしている。

浜端ほか（1999）は、大学3年次に開講している障害者理解を得るための授業で、教員が障害者に直接取材したVTRや、取材に応じた障害者の手記や写真などの資料を活用した間接的障害者参加型授業と、学生が運動機能障害者の役割を演じて、実際に街に出て日常生活行動を行う障害者疑似体験を実施している。この授業によって、障害者に関する事実の容認などの一般的理解が増加したとしている。

#### 4-3 社会福祉士養成における利用者理解に関する教育内容

野村ほか（2014）は、プレイバック・シアター、即興劇を用いた自分のストーリーを語る舞台、のウォーミングアップ等を参考にして作成された「人間関係力向上プログラム」を授業で実施した。対象は大学1年生である。人間関係直向上プログラムによって、他者感情の気づきを高める傾向がみられたとしている。

### 5. 考察

資格養成における教育の内容に関して、介護福祉士と看護師は資格養成全般に渡る教育理念としての目標が示されているのに対し、社会福祉士はカリキュラム実施にあたっての「ルール」の列挙に終始している。もちろん、介護福祉士と看護師と同様に資格取得のために必要な科目、ねらいと教育に含むべき事項は示されている。

しかし、社会福祉士が関わる対象は幅広い。対象ごとの制度政策だけでも膨大な量・内容になることから、社会福祉士学校指針に示されている教育内容は、本来最重要視されなければならない利用者の尊厳・人権を尊重した利用者理解が脇に置かれ、制度政策の理解、「ソーシャルワークの展開過程」の理解が中心である。

利用者の尊厳・人権の尊重、利用者理解は、当然視されていることから示されていないのかもしれない。また、ソーシャルワークの展開過程のアセスメントの学習で包含されると捉えられているのかもしれない。

しかし、利用者理解とアセスメントとは異なる枠組みで捉える必要がある。本来アセスメントは、全人的な利用者理解を根拠としているが、これまで人を全人的な視点で見てきたことがなく、生活体験が乏しいといわれるいまの学生は、アセスメントとはプラン作成のためのアセスメントシートにある項目を機械的に埋めて、制度の枠組みのサービスを組み合わせればよいと捉える傾向にある。また目の前にいる「現在」の利用者にとらわれてしまうことが多い。

人の生きる道は、時間と共に形成される。過去－現在－未来と連綿と続く。利用者を理解するためには、この時間軸に基づいた理解が重要である。たとえ子どものように年齢が低く、過去の時間が短いとしても、時間軸に基づいた理解が必要である。アセスメントの1項目としての生活歴として捉えるのではなく、その人自身の人生を紐解くことである。介護福祉士養成におけるライフレビューブック作成は、利用者理解を促す方法として有用ではないかと考える。

ソーシャルワーク教育団体連絡協議会（2016）による報告書には、厚生労働省が示した「新福祉ビジョン」の総合的評価として社会福祉士養成において、講義科目が細分化されすぎており、法制度やサービス提供に関する解説に偏重している。実践力修得のために「人権、社会福祉の価値や目的に関わる教育を重視すべき」と示されている。

現在進められている社会福祉士養成カリキュラムの見直しが待たれるところではあるが、養成校の教員、社会福祉の現場の実習指導者、実習指導者以外の現場職員も利用者理解について改めて捉え直して、社会福祉士を目指す学生指導にあたる必要がある。

## 【文献】

秋山智久, 1987, 「ソーシャル・ワーカーの資格はどうあるべきか——『社会福祉士』資格法定化を中心に」『社会福祉研究』40 : 37-42.

遠藤順子・澁谷恵子・菅原真優美, 2012, 「看護基礎教育における模擬患者を活用した教育効果の検討——口腔ケア演習を通して（第1報）」『新潟青陵学会誌』4（3）: 33-42.

萩原稔・谷口幸一, 2000, 「高齢者施設における利用者理解の教育の必要性——介護福祉士養成教育の在り方についての調査研究から」『高齢者のケアと行動科学』7（1）: 20-26.

浜端賢次・溝口満子・平野眞, 1999, 「障害者理解のための学習方法」『東海大学紀要.教育研究所』6 : 75-84.

井川淳史・向山幸子・水野尚美・野田由佳里・大村光代, 2011, 「新カリキュラムにおける実習教育の障害者施設に関する研究（2）——I 実習前における学生の利用者理解を通して」『愛知文教女子短期大学研究紀要』32 : 77-84.

小坂信子・永易裕子, 2010, 「構成的エンカウンターを活用した看護基礎教育における対人関係能力の育成——不快感情を持つ他者理解」『日本赤十字秋田看護学校・日本赤十字秋田短期大学紀要』15 : 9-15.

厚生労働省, 2016a, 「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現——新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」（2017年1月3日取得, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000098006.html>）.

———, 2016b, 「「新しい時代に対応した福祉の提供ビジョン」工程表（案）」（2017年1月3日取得, <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokuyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000117426.pdf>）.

———, 2016c, 「社会福祉士学校及び介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針について（28文科高225号 社援発0401第42号 平成28年4月1日）」（2016年12月27日取得, [http://www.jascsw.jp/doc/201606016-1\\_syadai\\_shishin.pdf](http://www.jascsw.jp/doc/201606016-1_syadai_shishin.pdf)）.

———, 2016d, 「『看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインについて』の一部改正について」（医政発1101第10号 平成28年11月1日）.

京極高宣, 1987, 「社会福祉の専門性について——『社会福祉士及び介護福祉士法』成立後の課題（『社会福祉士及び介護福祉士法』の成立と今後の展望＜特集＞）」『月刊福祉』70（9）: 42-51.

- 松田千登勢・長畑多代, 2004, 「老年看護実習における学生の痴呆性高齢者の理解プロセス」『大阪府立看護大学紀要』10(1): 43-50.
- 宮地真澄・大町弥生・平良陽子, 2005, 「老年看護実習における学生の高齢者理解——ケーススタディの内容分析から」『藍野学院紀要』19: 43-49.
- 村上信・三富道子・伊藤桜, 2000, 「利用者理解を促進するための実習指導プログラム——人権や人間の尊厳を大切にす視点」『介護福祉学』7(1): 125-134.
- 永島稔子・深川友子・山口玲子, 「介護福祉実習生の人間理解に向けた『利用者のためのガイドブックづくり』の試み」『西九州大学健康福祉学部紀要』38: 29-36.
- 中村剛, 2006, 「社会福祉における固有な人間理解——存在者・存在・他者という3つの次元から」『社会福祉学』47(2): 3-15.
- 野村知子・久米喜代美・石川利江・友永美帆・松田与理子・坂田澄・島津淳・谷内孝行, 2014, 「相談援助の基礎学習としての『人間関係力向上プログラム』の実施と効果に関する報告」『Obirin today: 教育の現場から』14: 103-117.
- 芝田裕一, 2013, 「人間理解を基礎とする障害理解教育のあり方」『兵庫教育大学研究紀要』43: 25-36.
- 新村出, 2014, 『広辞苑 第六版』岩波書店.
- ソーシャルワーク教育団体連絡協議会, 2016, 「ソーシャルワーカー教育の改革・改善の課題と論点＜最終報告＞」, 日本社会福祉士養成校協会ホームページ, (2016年12月31日取得, [http://www.jascsw.jp/doc/20161030shinhukushivison\\_last.pdf](http://www.jascsw.jp/doc/20161030shinhukushivison_last.pdf))
- 屋台安子, 2006, 「ライフレビューブック作成による利用者理解の効果」『松本短期大学研究紀要』15: 15-26.
- 米澤美保子・成清敦子・橋本有理子・竹中理香・清原舞・酒井美和・野村恭代, 2016, 「高齢者施設における相談援助実習生の利用者理解のプロセス」『国際教育研究センター紀要』2: 105-113.